

身体と魂の運動：

プラトン『法律』篇における乳幼児教育論

田中一孝

『法律』篇において、プラトンは、子どもから老人にいたるまでの言わば生涯教育・生涯学習の議論を展開している。年長者については、60歳に近い老年の者であっても音楽や体育の教育に関わっていなければならないとされる(664c-d, 665b, 670a-b, 813d-e)。他方、子どもの教育については、3歳からは、監督下のもとで遊びを通じて魂の性状を整えるとされ(793e-794a)、6歳以降は諸々の学習科目(μαθήματα, 794c)に就き、また少年の歌舞団に所属しながら歌舞教育を受けるべきだと定められる(664b-c)。これらの教育は法で定められるものだが、他にも「慣習や習慣、ならわし(793c7-d1)」と呼ぶべきごく若い子どもに対する家庭内の教育がある。これは、国制全体にとっては「支柱(792c2)」となるほどの重要性を持っているとされる。本論がテーマとして取り上げるのはこのごく幼い、乳幼児に対する教育である。

生物はその最初期の成長が最も多大である(788d1-2)。そこで、『法律』篇の登場人物であるアテナイからの客人は、妊婦の散歩など、現代で言うところの胎教や、赤子のあやしについて議論を展開している(789a-793a)。妊婦の散歩も、歌いながら赤子を揺さぶってあやすことも、幼い子どもに対して運動を加えるということに共通の特徴がある。そして興味深いことに、胎児に外から運動を加えることは、その子の身体的な成長を促すためだけではなく、魂の成長のためにも行われる教育であると考えられている。同様に、泣いている赤子を揺さぶりの運動によってあやすことは、その子の悲しみや恐怖を取り除きながら、勇気を養うための教育であるとされる。

現代では、妊婦が運動する際の胎児への影響は、胎児の心拍数の変化において観察可能なことが知られている¹。また、子育ての場面を思い浮かべさえすれば、腕で抱えて揺らし、揺りかごで動かすことが、子を泣き止ませるためには有効であると直感できるであろう。したがって、プラトンが『法律』篇で描いているように、ある種の身体運動が胎児や乳幼児に影響を与えることについて、同意することは難しくない。だが、子に運動を加えることを魂の教育と理解しようとする、すぐに疑問が生じてくる。というのも、子を揺らすという行為は、身体に対して物理的な刺激を与えることにほかならない。どうして物

¹ The American College of Obstetricians and Gynecologists.

理的な刺激を与えることが、子どもの魂の教育につながるのであろうか。プラトンは、赤子があやされて泣き止むことについて、単なる物理的・身体的な連鎖反応の関係としてではなく、魂をも巻き込んだプロセスとして理解している。その意味では、『法律』篇における乳幼児教育の議論は、プラトンの心身論を考察するための一つの手がかりともなりうるだろう。本稿は、『法律』篇における乳幼児の教育について論じることを通じて、外的な運動と魂の影響関係について、プラトンはどのように考えていたのかを明らかにしたい。

本稿の構成を先に述べておく。まずⅠ節では、『法律』篇7巻に導入された乳幼児教育論の議論の目的と、解釈の主たる対象となるテキストを確認する。Ⅱ節では、当該テキストについて、有力な先行研究であるボボニチとカムテカの解釈を検討する。Ⅲ節では、『法律』篇10巻の魂の自発的動と物的な他動の関係を検討する。Ⅳ節では、10巻の自発的動と他動の関係を踏まえて、身体運動が魂の運動を「凌駕」するとはどういう事態なのかを明らかにする。最後に、Ⅴ節では、身体運動による魂の運動の「凌駕」がどのように起こるのか、外的世界の変容に起因して魂が変容するプロセスを考察する。

Ⅰ. 乳幼児教育の目的

まずは乳幼児教育導入の文脈を確認しよう。『法律』篇の第7巻の冒頭では、家庭内の私的な養育 (*τρόφη*) と教育 (*παιδεία*) についての議論の必要性が指摘される (788a ff)。家庭内の教育については、法律として定めることはできない。なぜなら、「私的にまた家庭において生じる多くの細々とした事柄は、誰もが目にするわけではない (788a5-6)」からである。だが、こうした家庭内の事柄は、国家にとって重大な意味を持つ。なぜならそれらは、「個々人の快苦や欲望によって、立法者が企図したものに容易に反し (a6-b2)」、「市民たちの性格を種々雑多で互いに似ていないものに仕上げる (b2-3)」ことがあるからである。私的に法に反した習慣を身に着けてしまえば、それは書かれた法律を危険に陥れる (b6, 822d-823a)。したがって家庭内や私的な事柄について、事細かい法を定めることはできないが、語ることは重要である。

その際にまず、家庭内の私的な教育として取り上げられるのが、妊婦の散歩といった胎教である。胎教の重要性は、雛鳥の養育との類比で説明される (789b7-d7)。すなわち、闘鶏用の雛鳥を飼育する者たちは、雛たちを互いに争わせることだけではトレーニングとして十分ではないと考える。そこで飼育者たちは、その雛を持って何スタディオンも歩きまわるということを習慣的に行っている、というのである。なぜなら、全ての身体は「運ばれたり (*φερομένων*, d4)」、「動かされたり (*κινείται*, d5)」しながら、「揺さぶりと運動 (*τῶν σεισμών τε καὶ κινήσεων*, 789d1-2)」を加えられることを「原因 (*διὰ ταῦτα*, d5)」として、飲食の栄養を消化し、健康や美、他の力などを受け取ることができるからである。胎児の身体もまた、雛と同様、外部から揺さぶりと運動を加えられることによって、母体

の中で成長が促される。

こうした揺さぶりや運動についての記述には、外部からの物理的な刺激が、我々の持つ身体の成長に対して影響を与えるという理解が表れている。加えて、この影響の仕組みは、魂をも巻き込んで機能する。アテナイからの客人は、外的な刺激が身体だけでなく魂に対しても作用することを、赤ん坊の世話やバックスの狂気を事例に、次のように説明する。

T1

そこで次のことを、身体と魂という双方の場合に当てはまるものとして、言わば原理 (στοιχείον) としましょう。すなわち、ごく幼い子どもたちの身体と魂が、昼夜を問わず、世話をされ、可能な限り運動するようにすることは (σώματος τε καὶ ψυχῆς τῶν πάνυ νέων τὴν τιθήνησιν καὶ κίνησιν γυννομένην ὅτι μάλιστα διὰ πάσης τε νυκτὸς καὶ ἡμέρας)、全ての者にとって、とりわけごく若い者たちにとって有益ですし、可能であれば、あたかも常に船上にいるように暮らすこともまた、同様なのです。ですが今は、子の中でも生まれたばかりの生命に、できるだけそれと同じ状況を作ってやるべきです。これは以下のことから証明されるべきです。すなわち、この原理は、幼子の乳母たちや、コリュバンテスの病の治療を施す女たちが、経験から採用し、有益だと認識しているのです。というのも、母親がなかなか寝付かない子どもを寝付かせようとするときには、腕の中で絶えず揺さぶりを与えて (σειόουσαι)、彼らに静止ではなく反対に運動を、沈黙ではなく何らかの歌をもたらし、バックスの狂気に取り憑かれた人々を癒すがごとく、まさに言わば、笛の呪いをかけてしまうのです。歌舞 (χορεία) と音楽 (μούση) が結びついた運動を用いながら。(790c5-e4, 私訳)

幼い子どもの養育において、身体と魂を運動させることは「原理」である。それは、子どもたちが自ら動く運動ではなく、動かされるという意味での運動である。乳母たちは、赤ん坊を寝かしつけるために、船上にいるかのように等間隔のリズムで運動を与える。こうした赤ん坊に対する養育は、『法律』2巻において論じられていた、若者たちに運動秩序を与える歌舞教育論に接続するのは明らかである。実際、赤ん坊を揺さぶることは「歌舞 (cf. 791a7 ὀρχουμένων)」、子守唄が「音楽」とも言われる。「知性 (νοῦν, 672c1)」が十分に身につけていない、無秩序な子どもたちに秩序を与えることが、「音楽や体育の始まり (672c)」なのである。

赤ん坊は眠る際、当然のことながら、動きを止め沈黙する。それにも関わらず、どうしてむしろ動きと歌を与え、寝かしつけるのか。アテナイからの客人は、コリュバンテスの狂気や赤ん坊が泣くことが運動によって収まる仕組みについて、次のように説明する。

T2

これら両者のパトス (*τὰ πάθη*) は、どこか、恐怖を感じているということ (*δευμαίνειν*) であり、恐怖は何か魂の悪化した状態のために (*δι' ἕξω φαύλην τῆς ψυχῆς τῶα*) 起こります。そこで誰かが外側からそのようなパトスに揺さぶりをもたらすと、外側からもたらされた運動が、恐れと狂気という内部の運動を凌駕します (*ὅταν οὖν ἕξωθεν τις προσφέρῃ τοῖς τοιούτοις πάθεσι σεισμόν, ἢ τῶν ἕξωθεν κρατεῖ κίνησις προσφερομένη τὴν ἐντὸς φοβερὰν οἴσαν καὶ μανικὴν κίνησιν*)。凌駕してしまえば、その運動は各人の心臓の苦しかった動悸の代わりに、魂の中に静けさと安らぎを生じさせるのですが、とても歓迎すべき結果があります。すなわち、子どもたちに対しては眠りにつかせ、目覚めている人びとに対しては、各人が犠牲を捧げて善い徴を得た神々の助けを得ながら、パイプを吹きながら踊るようにします。そうやって我々の狂気の状態を、正気に戻すのです。かくして、簡単に語りはしましたが、もっともな説明になっていると思います。(790e8-791b2, 私訳)

泣いた子の寝かしつけや狂気からの回復には、二種類の運動が関わっている。一つは魂の「内部の運動」とされるものである。赤子の場合、その子は泣きながら恐怖というパトスを被っており、これが心的な運動として捉えられている。「魂の悪化した状態」という表現からわかるように、恐怖とは、正常な状態から逸脱した魂の運動である。もう一つの運動とは、魂の「外側から与えられる運動」である。混乱した魂の内的運動は、外側からの運動がもたらされると、「凌駕されて (*κρατεῖν*, 791a2, a3)」いく。つまりプラトンは、泣き叫ぶ赤子が平静をとりもどすことを、魂における内外の運動のある種の相克関係として捉えているのである。子どもの魂も含め、「全ての魂は恐怖とともにあるほど、より一層、恐れを習慣を身につける (*ἐθίζοιτο*) (b5-6)」。こうした悪徳を習慣として身につける「臆病のトレーニング (*δειλίας ἀσκησιν*, b7)」に対して、外部から望ましい運動を与え続けることが、ごく幼い子どもに対するまさに「体育 (*γυμναστική*, c5)」であり、「勇気のトレーニング」であると言える。「トレーニング (*ἀσκησις*)」という語が示唆するように、我々の魂の性状を変化させるためには、繰り返し外部から運動を加える必要がある。言い換えれば、我々の魂の運動は、言わば慣性を持っている。恐怖を感じやすい魂に、秩序だったリズムの運動を加えても、一時的には魂の運動は正常に戻るかもしれないが、おそらくは、やがて混乱した運動を再開する。そうした臆病な魂を完全に矯正するには、継続的に正常な運動を与え続けなければならないのである。恐怖を克服するトレーニングとは、まさに、苦痛をしつける教育と言ってよい²。そしてこの教育は、どのような快樂に接するかにも関わっている (792b9-c1, d5-7)。

² 苦痛は恐怖と一組みにされ、勇気が戦うべき対象であると考えられている (633c9-d2)。他に恐怖と苦痛が組み合わせで語られる箇所は、635b-d。苦痛が恐怖に言い換えられている箇所は、647a。苦痛の予期としての恐怖については、644c-d。Meyer (127) も参照せよ。

秩序のある肉体的な運動を外から与え続けることによって、内的な魂に秩序をもたらす矯正していくことは、『法律』篇における乳幼児教育、さらには『法律』篇の教育論の中心を占める歌舞教育全般に通底するモチーフと言って良い。一方で、外的な肉体的運動が、魂の内的な運動を凌駕するというプラトンの説明は、具体的にどのようなことを指しているのかわかりにくい。というのも、プラトンは、魂の矯正を論じる際に、「揺さぶり」と「運動」といった、物理的な表現を用いている。そのとき、どのようにして可感的で物的な肉体が、感覚によって把握されない非物体的な魂（898d-e）に影響を与えるのだろうか。

II. ボボニチ=カムテカ説の検討

魂の内外の運動の相克は、果たしていかなる仕組みによって起こるのか。考察の手がかりのために、近年の有力な解釈者であるボボニチとカムテカの主張を検討しよう。ボボニチは『ピレボス』篇や、『ティマイオス』篇における快楽の議論に言及しながら、快楽統御の観点から、『法律』篇の教育論における若者たちの倫理性の涵養について論じている。カムテカは、ボボニチの議論を『法律』篇の体育論解釈に応用している。

ボボニチによれば、後期対話篇においてプラトンは、快楽が認識論的な内容を持っているという立場を取っている³。そして快楽を味わうことは、何が快いものであるかを理解するという認識論的な達成を意味している。この主張は、『ピレボス』篇における「真の快楽」を他の快楽と区別する議論の解釈に依拠している（51b-d）。そこでは、真の快楽の具体例として、直線や曲線によって構成される平面的・立体幾何学的な美が持つ快楽が挙げられており、そういった美は「他のもののように何らかの観点で美しいというのではなくて、常にそれら自身において本性的に美しく、何らか固有の快楽を備えていて、その快楽は皮膚を搔いて得られる快楽などとは似ても似つかぬ（山田訳）」と言われる。この快楽は、たとえば皮膚を搔く際の快楽のように、皮膚のかゆみといった苦痛が伴わない意味で純粹であり、飢えや渇きといった欠如の苦痛も伴わない。対して、ほとんど多くの身体的な快楽は、充足や回復の前提として被るところの、苦痛を伴っている。ボボニチが強調するのは、ここで挙げられる真の快楽とは、幾何学的な美の視覚的認識が例として挙げられているように、感覚知覚に由来しているということだ。人間が美しい線や色を見るときには、そうした知覚可能な性質について理解を深めていると同時に、美しさという直接的に知覚ができない抽象概念についても理解を深めている、プラトンはそう論じているのだとボボニチは理解している⁴。

もう一つのボボニチの議論のポイントは、快楽はしばしば理知的なものである、という

³ Bobonich (2002), 350-373.

⁴ Ibid., 355-357.

ことである⁵。たとえば、『ティマイオス』篇では、遅い音と速い音によって構成されるハルモニアが、「知恵なきものたちに快樂を、知恵ある者たちに喜びを（80b6-7）」もたらすと言われる。ボボニチによれば、知者はハルモニアの持つ秩序に快樂を見出し、その快樂は秩序や美しさについての理知的な理解に貢献する。また『法律』篇でも、リズムとハルモニアが若者たちに快樂をもたらすと言われ、他方、動物は、人間と対比的に、運動における秩序と無秩序の感覚を持ってはいないと言われていた（653d-654a）。理知的な能力が人間と動物を分かちつとすれば、リズムとハルモニアに基づく運動の快樂は、そうした人間の理知的な能力と密接に関わっているだろう。円環的秩序を持った天体や幾何学の美を見ることはもちろん、音楽を聞きリズムに即して踊るような、よりプリミティブな活動からもたらされる快樂もまた、理知的な能力に依存しうるとボボニチは考えている⁶。

快樂を味わうことが認識論的な理解を伴うこと、そしてそうした快樂を味わうには理知的な能力が必要であること、以上の2点に基づいて『法律』の快樂の教育を解釈すると、次のようになる。すなわち、若者に適切な快樂を経験させることは、そうした快樂をもたらすものの美や秩序を認識させることにほかならず、これが学びなのである。カムテカはこうしたボボニチの議論を引き継ぎながら、『法律』篇の体育教育を解釈している⁷。人間は、身体的なトレーニングを積むことによって、非理知的な情念から離れることができる。情念から離れるとは、単にトレーニングにおける身体的な苦痛を我慢し、精神的に克服するということではない。カムテカによれば、たとえばあやされている赤子であれば、運動を加えられたまさにそのときに、恐怖という誤った情念を排し、運動に現れる秩序について理解を深めているという。外的な運動を加えられることによる魂の内的な性状変化とは、快苦の経験を通じ、認識論的に理解を深めることなのである。

以上が身体運動による教育についての、ボボニチ=カムテカ説の概要である。この主張について、三つの問題を指摘したい。まず、カムテカからは『ピレボス』篇の苦痛の混じらない純粋な快樂を、『法律』篇の当該テキストに読み込んでいるが、それは難しい。体育は、身体における健康や美や力を生むためのものであり、胎内における赤子の食物や飲み物などの栄養摂取も含んだ教育であった（789b-d）。これらの快樂は欠如からの回復・充足を通じて生じるものであると『法律』篇でも示唆されており（782e-783b）、その意味において、純粋な快樂ではない⁸。

⁵ Ibid., 357-359.

⁶ 『法律』篇において、人間が秩序的な運動（とりわけ歌舞）に快樂を感じることは、Morrow (305-307)。『法律』篇の歌舞について、歌舞が星々の運行を模している点でコスモロジー的な根拠に持っている点については、Kurke (138-145)。

⁷ Kamtekar, 144-146.

⁸ もっともこの批判に対しては、胎教と赤子のあやしを区別し、前者を身体教育であり、後者を魂の理知的教育であるとする、と言えるかもしれない。言い換えれば、胎教は、秩序だった運動に対しての理知的な認識は含まないが、赤子のあやしは、美的な秩序に対しての純粋な快樂に基づいていると反論できる。しかしながら、食欲と性欲は「病（683a4）」、性欲は

次に、カムテカは、赤子の恐怖の克服が快樂によって行われていると考えているようだが、アテナイからの客人は、そのような教育の方針は採っていない。むしろ彼はもっぱら快樂によって苦痛や恐怖を退けることについては否定的であり、極めて危険であるとすら考えている (792b-793a)⁹。厳密に言うと、恐怖を凌駕すると言われていたのは快樂ではなく身体的な運動であって、おそらく快樂もまた、こうした身体的運動によって秩序付けられるべき対象である (ibid.)。

最後に、これは二つ目の批判とも関連するが、カムテカからの主張は身体運動と魂の運動の関係について、適切に説明していない。たしかに、赤子が泣き止み、恐怖を克服する際には、何らかの認識論的な快樂が結果的・付帯的に生じることはありうるだろう。その点において、乳幼児が外的世界と関わりながら、何らかの知的な「学び」を実践しているということも可能である。しかしこの議論は、身体と魂について用いられる、「運動」「揺さぶり」「凌駕」などの語彙を、結局のところ比喩として理解しているのであって、運動相互の影響関係についてほとんど説明していない。苦痛や恐怖などのパトスは、まさしく「運動」に他ならない (897a1-3)。こうした魂の「運動」が身体運動からどのような影響を受けるのか、また魂の運動が身体運動に「凌駕」されることが「学び」の活動にどうして還元可能なのか、カムテカからの議論からはわからない。

アテナイからの客人によれば、生まれたばかりの子どもは、知性を欠いた存在であり、幼児は、隙を狙って快苦を貪ろうとする抜け目のない獣のようなものである (672c1-2, 808d2-e4)。そうだとすれば、仮に大人によって快苦を感じる機会が適切に設けられたとしても、子は勝手気ままに肉体的な快樂と苦痛を往復してもおかしくはない。だが、アテナイからの客人は、乳幼児の快苦はしつけられうると考えているし、現代の我々もまた実際その通りであると経験的に理解している。我々が知りたいのは、魂の内外の運動が相互にどのような関係にあり、そうした影響関係が、なぜ赤子の学びとしても理解できるかである。

III. 自発的運動と他動

プラトンは、乳幼児の教育において、「揺さぶり」や「運動」という表現を用いて肉体

「狂気 (783a2)」と呼ばれ、こうした病の増大を防ぐために法や言論や教育の力が必要とされる。「病」や「狂気」などの表現が、バックスの狂気やコリュバンテスの病の治療という当該箇所の議論に通底しているとしたら、そこで感じられる快樂とは、苦痛を伴わない純粋な快樂ではなく、あくまでも苦痛から回復する際の「皮膚を搔くような」快樂と理解せざるを得ない。

⁹ 付け加えると、カムテカからの議論は、苦痛の克服を説明できても、快樂の克服をうまく説明できないように思われる。繰り返すまでもないことだが、『法律』の教育論は快苦の教育に関わることである。カムテカからの解釈の線を採用すると、過剰に快樂を感じている幼児に対しては、認識論的な学びを伴った適度な苦痛・懲罰を与えるべき、ということか？

と魂の相互作用を説明していた。こうした表現は、あたかも物体が物体を押し出すように、肉体の物的運動が、直接的に心的運動を押しやり、新たな運動として魂に居座るという事態を示しているようにも見える。しかし、物的運動が魂の運動を引き起こすことは、『法律』篇において否定されている。このことは、第 10 巻における神の存在の論証において確認できる。

アテナイからの客人は、神の存在を論証するために 2 つの議論を展開する。一つは、すべての運動の源は魂であり、そして魂は自分自身を動かすということ (891e-897b)、もう一つは、宇宙の運動は最も規則的でかつ秩序あるものであり、理性と徳を備えた魂(すなわち、神々)によって引き起こされることである (897b-899d)。一つ目の議論のために、アテナイからの客人は運動を 10 種類に分類する。すなわち、一つの位置での運動、多くの位置間の場所運動、分解と合成、増、減、生成、消滅 (893c3-894a8) と、「いつも、他のものを動かすことはできるが、自分自身を動かさない動」(他動, 894b8-9)、「いつも、自分自身も、他のものも——合成と分解、増大と減少、生成と消滅によって動かせる動」(自発的運動, b9-c11) である。アテナイからの客人と対話者のクレイニアスは、自分で自分を動かすものは、「生きている (ζῆν)」こと、そして魂とは「自分で自分を動かせる動」に他ならないことに同意する (894c-896a)¹⁰。

目下、我々の議論にとって重要なのは、魂の自発的運動が他の運動とどのような影響関係にあるかである。自発的運動は、全ての運動の始原であり、最も年長であり力を持つ「第一番目のもの (πρώτην, 895b4, 896a7, cf.894d10, e5, 7)」とされる。対して、他動も含めた他の運動は、「第二番目のもの (δευτέρα, 896b6)」であり、「まさに魂なき物体の変化 (σώματος οὔσα ὄντως ἀψύχου μεταβολή, 896b7-8)」である。魂が第一番目の運動にのみ関わり、第二番目の魂なき運動¹¹に関わらないとすれば、魂は自己と物体の運動を引き起こすことはあっても、他のものによって動かされることはないだろう。アテナイからの客人は、この帰結について直接的に言及していない。しかし他のものに動かされることが魂の一つの属性であれば、魂は自己自身を動かさなくなってしまう。なぜなら、他のものによって引き起こされる運動と自発的運動は排他的であり、他のものによって動かされるものが、自分自身を動かすことは「決してない (896b5)」と言われているからである¹²。

¹⁰ なぜ魂は動であると言われるのか、これを理解するのはとても難しい。この議論についての批判的分析は、Stalley (169-172)。アテナイ人の客人によれば、魂という「名 (ὄνομα)」が付けられる「あるもの (οὐσία)」の「定義 (λόγος)」が、「自分で自分を動かすもの」であるという (895d-896a)。すなわち、「魂」と「自発的運動」は、二つのものではなく、同一のものに関わる。Jirsa (246 n.26)は、この議論が十分でないことをアテナイ人の客人自身が自覚していることを指摘している。

¹¹ 魂なき物体の運動には、魂が宿るところの身体の運動も含まれる。さもなければ、分類の中で、身体の運動が占める場所がなくなってしまう (England, ad loc.)。魂は、動いているもの全てにあまねく宿っており (διοικεῖν, 896d10-e2)、その魂の支配のもとで、森羅万象は運動しているのである (896d-897b)。

¹² 付け加えると、自発的運動とそれ以外の運動が排他的であるとすれば、魂がある時点は自発的運動し、別の時点では他の運動にあずかるということも、ありえないだろう。なぜなら、

当該議論のコンテクストは無神論者に対する神の存在証明にある。そこで焦点となる魂とは、宇宙を司る神的な魂である。しかし、魂の自発的運動と他動の議論は、「全ての運動 (894a8, 895a2, 896b2)」を網羅している以上、そこから肉体的な運動やそれと関係する個々の魂の動を理解することもできるであろう¹³。896e8-9 では、魂が導き動かすものとして、天だけでなく地や海などが言及されており、これら具体的な領域の枚挙は、人間の魂も含めた魂一般がこの世界に関わっていることを論じているように見える¹⁴。さらに、アテナイからの客人は、魂の動を論じる際には、個々の生きているものについての理解を前提としていることも指摘できる¹⁵。加えて、『パイドロス』において、魂が自発的に運動するものとして描かれることも、当該テキストの理解に役立つ (245c-246a)。そこでは、魂は「自分自身によって動かされるもの (τοῦ ὑφ' ἑαυτοῦ κινουμένου, 245e3)」とされ、「あらゆる物体 (πᾶν σῶμα, e4)」について、外から動かされるものは「魂を持たず (ἄψυχον, 245e5)」、内から動かされるものは「魂を持つ (ἐμψυχον, 245e6)」と言われる。『パイドロス』における魂と物体・肉体の動についての記述を踏まえれば、『法律』における魂の自発的動と他の運動に関する議論を、個別的な魂と肉体の動の関係に適用することはできるだろう¹⁶。

魂は他のものによって動かされない。これは驚くべき帰結に思える。実際、我々の個別的な魂は、対話や議論を通じて説得されているとき、心的な影響を受けているように感じるし、外的な刺激を通じて心的に快楽や苦痛を味わうことがある。しかしながらアテナイからの客人は、魂が、他の魂や物体によって動かされているように思える際にも、実のところ自ら動いているのだと考えている。Halper によれば、たとえば、ある魂が他者から説得されている際、説得によって魂が直接的に動かされているのではなく、魂が説得に同意するよう動いているという¹⁷。こうした魂の自発的な運動には、我々が「欲求、考慮、配慮、熟慮、正しい判断と誤った判断、喜びと苦しみ、大胆と恐れ、憎しみと愛 (897a1-3)」などと呼ぶ全ての心的働きが含まれている¹⁸。我々が、感覚知覚を通じて外的世界によって引き起こされたと考える心的働きであっても、魂が外的世界を解釈、判断し、魂が受け入れた結果なのである¹⁹。

魂は「いつも (894b9)」自己自身を動かしているのだから。自発的運動は「生きている」ことに他ならず、魂が他動的であれば、それは「生きていない」ということになってしまう。

¹³ England (II. 474)

¹⁴ Jirsa (249). Jirsa は、魂が複数あると主張された直後に、魂が単数形で議論されていることを指摘し、当該議論は世界靈魂という特殊な魂ではなく、魂一般についてのものであると述べている (896e)。

¹⁵ アテナイからの客人は、火、土、水の混合物における自発的運動を例に挙げながら、「生きている」ことを説明している。そこでの混合物に関しては、動物や植物が念頭に置かれている (cf. Mayhew, ad loc.)。

¹⁶ Cf. Carone, 279.

¹⁷ Halper, 259-260.

¹⁸ Cf. 892b.

¹⁹ Cf. Halper (260).

他方で、一見すると、魂の自発的運動が物的運動から影響を受けることを示唆する記述がある。たとえば、自発的運動とは、「(物体の²⁰) あらゆる作用と被作用に調和する (*ἐναρμόττουσαν πᾶσιν μὲν ποιήμασι, πᾶσιν δὲ παθήμασι*, 894c5-6)」ものであると言われる。この記述は、魂が外的世界に適応するように変化しうること示唆している。また、第一次的な運動は、「今度は物体の二次的運動を受け取り (*τὰς δευτερουργοὺς αὐτὴ παραλαμβάνουσαι κινήσεις σωμάτων*, 897a4-5)」、万物を増減、分離結合、それらに付随する諸性質に導くと言われる。後者の表現にある *παραλαμβάνουσαι* は、あたかも一時的運動が、二次的運動によって作用を受けることを意味するようである。もしそうだとすれば、この記述は、魂がもっぱら自分自身と他のものを動かす一次的運動にあずかるという、議論の基本線から逸脱している。しかし、当該文脈においてプラトンは、物的運動が魂を「動かす (*κινεῖν*)」という表現を用いていないことに注意したい。こうした事実を、魂と外的事物の関係を記述する際のプラトンの慎重な態度の現れであるとすれば、ここでの「受け取る」は、魂が物体によって「動かされる」被作用性に関するものではないと理解するのが自然である²¹。むしろ当該文脈は、魂の一次的運動が二次的運動を「導く (*ἄγουσι*, 897a5)」方法、すなわち二次的運動への働きかけ方を説明することにある。魂は、外的な運動を「所与として受け取る²²」のであって、物体を動かす際は、その物体の状況と無関係かつ無分別に働きかけるわけではない。このことは、自発的運動が物体の作用・被作用と「調和する (*ἐναρμόττουσαν*)」という先に触れた表現からも確認できる (894c5-6)。「調和」とは、魂が物的対象に適合するように動かされるということではなく、物体の二次的運動を適切に「受け取った」上で、その物体を、動くべき方向へと変化させることなのである。

²⁰ Cf. England, ad loc.

²¹ 主要な解釈者たちは *παραλαμβάνουσαι* を「支配する・統括する」意味に、あるいは「引き起こす」の意味に理解している (Easterling (31), Mohr (168), Mayhew (ad loc.), Jirsa (249) は “taking over”、岩波全集訳では「支配下において」)。こうした解釈は、魂の作用的側面を強調し被作用的側面を弱めるために有効であるが、不要な工夫であると私は考える。

παραλαμβάνεσθαι の基本義は「(誰かから) 受け取る」なので、支配権 (LSJ, I.1) を「引き継ぐ (taking over)」という文脈や、女性を妻として受け入れることや、人を「味方につけ、支配する (LSJ, II.1)」という文脈でも用いられるが、いずれにしても、「引き受ける・受けとる」という原義は失われていない。上の解釈者たちは *taking over* という英語の多義性を利用して、こうした原義を弱めながら、むしろ魂の方が物体に作用・影響を与えているかのように解釈している (と私には見える)。対して、Griffith は単純に “taking” と訳しており、私もそれで良いと思う。

なお、ここでの *παραλαμβάνουσαι* は、魂が作用する前に無秩序な物的運動が存在するかという点で、『法律』篇と『ティマイオス』篇を比較検討する上で問題となっている。*παραλαμβάνουσαι* を「支配する」という意味で強く読むと、魂は物的運動を起動させるというよりは、既にあった無秩序な物的運動を、秩序づけているのだと理解できる。この問題については、Easterling の主張とそれに対する Mohr (167-170) の批判を参照。

²² 藤澤 (362)。

IV. 「凌駕」と「揺さぶり」

物体は、魂の運動とは無関係ではないが、「物体が物体を力づくで押す (899a1-2)」ように魂を動かすことはない。こうした物体と魂の運動の影響関係についての理解が、『法律』篇の基底を成しているとするれば、我々が考察の課題としてきた幼児教育の議論はどのように理解できるのか。もう一度 T1-2 に戻ろう。

厳密に言うと、赤子を腕の中であやし、音楽によって狂気の人を癒す手法を論じる際、プラトンは、魂を直接目的語に取りながら、「動かす (κινεῖν)」という表現を用いていないことに気づく。実際に用いられている表現は、魂に対して「揺さぶりをもたらす・加える (προσφέρειν σεισμόν)」、さらに外側からの運動が内部の運動を「凌駕する (κρατεῖν)」というものである。問題はこれらの表現が何を意味し、「動かす」とどう異なるのかである。

さて T2 では、恐怖という魂の運動が、外的運動を通じて鎮まるプロセスについて、次のように描写されていた。

- (1) 魂に恐怖というパトスがある (790e8-9)
- (2) 誰かがそのパトスに外側から揺さぶりをもたらす (e9-791a1)
- (3-1) 外的な運動が、内部の運動 (e.g. 恐れ、狂気) を凌駕する (a1-3)
- (3-2) その外的な運動は、凌駕し終わると、魂に静けさと安らぎを生じさせる (a3-5)

(1)の恐怖する魂に対して、(2)では外側から揺さぶりをもたらすと言われるが、「凌駕」が語られる(3-1)と(3-2)は、(2)が行われる際のできごとである (ὅταν, 790e9)。

注目すべきは、(3-1)と(3-2)は明らかに異なった段階だということである (κρατήσασα, 791a3)。すなわちプラトンは、外的な運動が魂の内的な運動を「(3-1)凌駕しつつある段階」と、「(3-2)凌駕し終えた段階」を区別して描写しており、後者の凌駕し終えた段階ではじめて静けさと安らぎが生じると考えている。言い換えれば、外的な運動が「凌駕する」とは、魂の静けさや安らぎを直接引き起こす作用というよりは、魂がそうした状態に徐々に移行する状況を示すものであり、外的な運動が優勢になり、恐怖という内的運動が後退していくプロセスを説明する表現である。外的運動が内的運動に対して、「物体が物体を力づくで押す」接触的作用を説明するものではない²³。

それでは、(2)のパトスに外側から「揺さぶりをもたらす (προσφέρειν σεισμόν)」とはどういう事態か。この「揺さぶりをもたらす」とは、魂のパトスのために揺さぶりを与え

²³ 645d-e では、飲酒によって湧き上がる快苦や怒り、情欲を自己統御できていることが、「凌駕している状態 (ἐγκρατής, 645e8)」だと言われる。ここでの「凌駕」は、自己とパトスという二者間の勢力争いについて、一方の優勢な状況を描写するために使われており、やはり両者の作用・被作用関係を説明するものではない。

ることであり、魂のパトスを揺さぶることではないことに注意したい。言い換えれば、「もたらす (προσφέρειν)」の目的語である「揺さぶり (σεισμόν)」とは、動かされる対象としての魂の運動ではなく、外的な運動である揺れそれ自体である。実際、直前では、ぐずる赤子や狂気の人に「もたらす (προσφέρειν)」べきものとして、赤子を腕で抱える際の揺さぶりや、音楽、そして静止と沈黙が挙げられている (790d6-e4)。これらはいずれも、外的な身体運動や不動であり、魂の内的な運動ではない。また、この後には、赤子に「もたらす」対象として、「赤子が欲しがるもの (791e9)」(それは主として飲食物などであろう) が挙げられている。これらの記述は、赤子に「もたらされる」対象が、外的なものであることを示している。したがって、(2)の「揺さぶり」もまた外的な運動と理解するのが自然であり、パトスに「揺さぶりをもたらす」とは、内的なパトスを揺さぶるという意味ではなく、「(魂の) パトスのために (τοῖς τοιούτοις πάθειν)」身体的な揺さぶりを「供する・提示する (προσφέρειν)²⁴」と考えることができる。外的な運動は、そのまま内的な魂の運動として移入されるのではなく、魂の運動のそばに示されるものなのである。このように内外の運動について明確に区分を敷くことで、身体と魂の運動には、物体相互が接触する場合に見出されるような、影響関係は存在しないと考えることができる²⁵。

以上の解釈のメリットは、魂は常に一次的運動にのみあずかるという、10巻の運動についての議論と一貫した心身関係を描けることである。赤子の苦痛は、身体の揺さぶりという二次的運動によって押し出されるものではない。赤子が身体をリズムカルに揺さぶられて泣き止むのは、10巻の表現を用いるならば、そうした身体運動を「受け取り (παραλαμβάνειν)」、身体の被作用に自ら「調和 (ἐναρμόττειν)」しようとした結果である。そして内的な運動である恐れや狂気が後退している事態が、まさしく「凌駕」されている状況なのである。

V. 外的運動と魂の運動

以上のように、T2 は、身体運動と魂の運動の接触的でメカニカルな作用・被作用の関係でなく、両者の優勢・劣勢の姿を描写したものだとして理解しよう。ではそのとき、身体運動はどのように優勢になっていくのか、あるいは、魂のパトスが外的な秩序にいかにか「凌

²⁴ LSJ, I.3.

²⁵ 身体運動が魂の運動を接触的に動かすのであれば、身体的な教育は魂に対して言わば必然的に効果を発揮することになる。しかしながら、プラトンは、快楽と苦痛の習慣的な教育がうまくいかないケースがあることも想定しており (653c-d, 654c-d)、当然のことながら、教育があらゆる人間に対して万能に機能するとは考えていない。だからこそ、教育を受けた人間が果たして本当に立派な人間であるのか、年を経てもたびたび試金石にかけられなければならないとプラトンは考えている (649d-650b)。プラトンは体育教育が魂に機械論的に作用することを認めていないということについて、こうしたこともまた、傍証として挙げられるだろう。

駕」されるのだろうか。我々は赤子など「まだ言葉（φωνήσ）を理解することができず、他の教育をも受けることができないものたち（791e1-2）」を養育しなければならない。だからこそ必要とされるのが、そういった人々の魂にすらも機能する仕組みである。ぐずる赤子や狂気の人々の魂が、秩序立った外的な揺さぶりや音楽を提示されただけで、それによって直接的・接触的な作用を受けないにも関わらず、どうして平静を取り戻していくのだろうか。

この問題については、魂の変容と身体変容をパラレルに説明した記述が参考になる。アテナイからの客人は、外的な環境や運動が、身体を変容させていくプロセスについて、次のように述べている。

T3

身体がありとあらゆる食べ物や飲み物、身体運動に慣れる（συνήθη）ときには、最初こそはそれらによって乱れが生じますが、やがて時間が経つと、まさにそれらのものから、それらと同類な（οικείας）肉を付け、そうした養生全体を好んで慣れて親しむ（φιλά τε καὶ συνήθη καὶ γνώριμα）ようになり、その人は、快適さと健康に関して最高の生活を送ります。そしてもし彼が、今度は何か別の評判の健康法に切り替えることを強いられたとすれば、はじめは不調に悩まされますが、食物への慣れ（τὴν συνήθειαν）を取り戻すことで、なんとかやっと回復するのです。（797e3-798a6, 私訳）

身体は、飲食や運動法などに変化が生じると、初めは身体に乱れが起きるが、やがてそれらに慣れ親しんでいく。注目すべきは、こうした身体の変容において「好んで慣れて親しむ（φιλά τε καὶ συνήθη καὶ γνώριμα, 798a1）」のが、我々の心的な嗜好ではなく、身体自身だとされている点である。身体の変容とは、身体自身が選好していくプロセスであり、従来と異なる環境や事物にさらされて不調が起こったとしても、同じ運動や飲食を経験し続ける限り、次第に慣れることができる。こうした傾向性は身体が持つ自然本性であり、我々がコントロールできるたぐいのものではない。また身体は、新しい飲食や運動と「同類な肉（σάρκας οικείας, 797e5）」を付けていくと言われる。つまり、飲食物や身体運動などは何らかの性質を担っており、身体はそれらを経験すると、同じ性質の身体へと変化していくということである。何らかの性質に接し、経験すると同種の性質を帯びるように変化していくこともまた、身体が持つ自然本性である。

この変容のプロセスは、魂にも当てはまると理解できる。実際、「同じことは、人間の思考や魂の本性においても生じると見なさなければなりません（798a6-8）」と言われている。魂は、外的な環境や事物が変化に応じて、そうした新しい状況に慣れて愛好し、同類の性質を担っていくのである。

身体における変容と同様に、魂における変容においてもまた、新たな外的な事物を「好

んで慣れて親しむ」ことは、我々が意図的に選択できる活動ではない。T3 は、遊びの変化が子どもたちに対して知らず知らずのうちにもたらす影響について論じた文脈に置かれている (797a-798b)。遊びの変化は些細なことに思われるが、それに触れる子どもたちの魂を、彼ら・彼女らが気付かない仕方では (λανθάνειν, 797c4) 変容させ、以前の世代とは違った人間を作り上げると言われる。外的な事物に慣れて、同じ性質を担っていくことは、我々の魂の持つ自然本性 (φύσεις, 798a8) 的な傾向であり、そうした変化は不可避な仕方で行進していくのである。魂が、外的環境・事物と同種の性格を知らず知らずのうち帯びていくことについては、『国家』篇においても語られている (401a-c)。すなわち、我々を取り巻く絵画や機織、刺繍、建築、自然物さらには我々自身の身体は何らかの性質・性格 (エートス) が内在しており、若者の魂はそうした事物の中で、同様の性格をまとっていきとされる。それは若者が意図的にコントロールできる活動ではなく「気づかぬうちに (λανθάνη, 401c8)」そういった性格と「似て (ὁμοιότητα, 401d1)」、「愛好 (φιλίαν, d1)」していくプロセスである。

泣く赤子への揺さぶりや、狂気を癒す音楽についての記述も、同じように説明できると私は考える。秩序だった揺さぶりや、リズムカルで良い調和の音楽は、魂を接触的に動かすための運動ではない。それらは魂に対して、秩序という性質を帯びた外的運動として、魂の内的運動に提示されるものである。外的な運動が内的な運動を「凌駕」する、あるいは優勢になることとは、恐れや苦痛によって乱れていた魂が、外的運動の持つ秩序を帯びていった状態なのである。すなわち、揺さぶりや音楽という新たな事物・環境を近接的に示されることによって、魂が、それらの事象が持つ性質を「好んで慣れて親しみ」、類似していくプロセスこそが、外的な運動によって「凌駕」されるということなのである。

本稿の議論を簡単にまとめよう。『法律』篇においてプラトンは、乳幼児の教育について、身体的な外的な運動と魂の内的な運動によって描いていた。すなわち、恐怖などの魂の内的な運動は、揺さぶりなどといった外側からの運動がもたらされると、それによって凌駕されるという。こうした二つの運動における凌駕し、凌駕される関係は、あたかも身体的な運動が、物理的な接触を通じて魂を動かしている事態を我々に想像させる。だがプラトンは、二つの運動の相互関係を描くために、κινεῖν やその同族語の使用を慎重に避けており、これは両者が接触的な影響関係を持たないことを示唆している。このことは、『法律』篇 10 巻における自発的運動と他の運動についての議論と一貫して理解できる。そこでは、物的事物の運動は魂を動かすことは決してないとされていた。もっとも、魂は外的世界と無関係に運動しているわけではない。魂は、外的世界のありようを受け取り、そこに調和するように運動することができる。眼前の世界に繰り返し触れることによって、そこに慣れ親しんで調和していくことは、我々の魂の持つ自然本性であり、そして乳幼児の教育は、この自然本性を利用することで成立している。我々が泣き叫ぶ赤子や幼児のために歌を歌い、体に揺さぶりを与えるのは、彼ら・彼女らの魂の自発的動に、秩序性を取

り戻すよう呼び掛けているのである。そのとき、秩序的な外的運動によって魂が「凌駕 (κρατεῖν)」されることとは、苦痛や快樂によって混乱した状態を克服したという意味で、魂が自らを「支配 (κρατεῖν)」していることであるとも言えよう。自分で自分自身を支配できるようになること、それこそが『法律』篇における教育の目的であり、快樂と苦痛のしつけによって達成されることなのである²⁶。

【文献】

- The American College of Obstetricians and Gynecologists (2020), “Physical Activity and Exercise During Pregnancy and the Postpartum Period,” *ACOG Committee Opinion* 804 (Replaces *Committee Opinion* 650, 2015), e178-e188.
- Bobonich, Ch. (2002), *Plato’s Utopia Recast*, Oxford: Clarendon Press.
- (ed.) (2010), *Plato’s Laws. A Critical Guide*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Carone, G. R. (1994), “Theology and Evil in *Laws* 10”, *Review of Metaphysics* 48, 275-98.
- Easterling, H. J. (1967), “Causation in the *Timaeus* and *Laws* X”, *Eranos* 65, 25-38.
- England, E. B. (1921), *the Laws of Plato*, 2 vols, Manchester: Manchester University Press.
- Frede, D. (2010), “Puppets on Strings: Moral Psychology in *Laws* Books 1-2”, in Bobonich (ed.), 108-126.
- Griffith, T. (2016), *Plato: Laws*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Halper, E. C. (2003), “Soul, Soul’s Motion, and Virtue”, in Scolnicov, S. and Brisson, L. (eds.), 257-267.
- Jirsa, J. (2008), “Plato on Characteristics of God: *Laws* X. 887c5-899d3”, *Rhizai* 5, 265-285.
- Kamtekar, R. (2010), “Psychology and the Inculcation of Virtue in Plato’s *Laws*”, in Bobonich (ed.), 127-148.
- Kurke, L. (2013) “Imaging Chorality: Wonder, Plato’s Puppets and Moving Statues,” in Peponi, A.-E. (ed.): 123-170.
- Meyer, S. S. (2015), *Plato: Laws 1&2*, Oxford: Oxford University Press.
- Meyhew, R. (2008), *Plato: Laws 10*, Oxford: Clarendon Press.
- Mohr, R. (2006), *God and Forms in Plato* (rev. and expanded edn. of *the Platonic Cosmology*, Leiden: Brill, 1985), Las Vegas: Parmenides Publishing.
- Morrow, G. R. (1960), *Plato’s Cretan City: A Historical Interpretation of the Laws*, Princeton: Princeton University Press.

²⁶ 653b-c. 教育が適切に施された人間が、自分自身を支配できるようになることについては、645e8, 673e7. 快樂や苦痛を支配し、あるいは支配されることが市民の重要な課題になっている点については、634a9, 636c6, 840c5, 840c8, 840e6, 886a9, 908c2, 934a4.

- Moss, J. (2014), “Right Reason in Plato and Aristotle: on the Meaning of *Logos*”, *Phronesis* 59, 181-230.
- Pangle, Th. L. (1980), *the Laws of Plato*, New York: Basic.
- Peponi, A.-E. (ed.) (2013), *Performance and Culture in Plato’s Laws*, New York: Cambridge University Press.
- Scolnicov, S. and Brisson, L. (eds.) (2003), *Plato’s Laws: From Theory into Practice, Proceedings of the VI Symposium Platonicum*, Sankt Augustin: Academia Verlag.
- Stalley, R. F. (1983), *An Introduction to Plato’s Laws*, Oxford: Basil Blackwell.
- 山田道夫 (訳) (2005) 『プラトン：ピレボス』 京都大学学術出版会
- 藤澤令夫 (2014) 『プラトンの認識論とコスモロジー：人間の世界解釈史を省みて』 岩波書店
- 森進一・池田美恵・加来彰俊 (訳) (1976) 『法律——立法について』 (田中美知太郎・藤沢令夫 (編) 『プラトン全集 13』 所収) 岩波書店

【後記】

本稿は、2019年9月14-15日に、埼玉大学において開催された第23回共同研究セミナーにおける発表、「プラトン『法律』篇における教育の心理学」に加筆・修正を行ったものである。セミナーにおいては、多くの参加者から貴重な質問とコメントをいただいた。とりわけ、司会を務めていただいた瀧章次氏には、詳細なコメントとともに、発表後には参考となる研究ノートをご提供いただいた。深く感謝を申し上げたい。

共同研究セミナーの発表では、乳幼児教育を基に、『法律』篇における歌舞教育論や子どもの理知的能力の成長までを論じようとした。本稿では、問題の焦点をはっきりさせるために、乳幼児教育論に絞って扱った方が良いと判断した。そこで、本稿では応答ができなかった質問とコメントに関連して、ごく簡潔に展望を述べたい。

乳幼児に与える運動の秩序性や、歌に現れるハルモニアは、歌舞論にも共通するテーマであり、その背景には秩序的な天体運動についての、プラトンのコスモロジーも深く関わっている。こうした問題については機をあらためて論じたいと思う。

アテナイからの客人は、教育とは「まだロゴスを把握できない者たち」の魂のためにあり、ロゴスを把握しそれと協調しているときに、人は有徳な人物になると述べている(653b-c)。このロゴスはしばしば「理性・理知的能力 (reason; the faculty of reason)」と翻訳されるが²⁷、近年の有力な解釈者たちは、ここでのロゴスとは理性そのものではなく、理性の発揮による原因理由 (アイティア) についての「説明的で規範的な言明

²⁷ England; Pangle; Kurke, 138-9; Griffith (2016). Bury は“rational account”.

(explanatory-cum-prescriptive account)」であると主張している²⁸。規範的であるとは、そのロゴスが法（ノモス）として個人の中に位置づけられ（645b, 835e）、情念や行為を統制し、その人が従わなければならない、ということである。また説明的であるとは、そうした規範がどのように善いもので正しいかを示すということである。人間のロゴスとは何を意味し、ロゴスを把握することとはどういう事態であるのか、これらは『法律』の教育論の目的と関わる大きな問題である。将来に取り組むべき課題としたい。

²⁸ Moss, 181-189; Meyer, ad. loc.